

信州大学教育学部授業「自然教育」の紹介

渡 辺 隆 一

信州大学教育学部志賀自然教育研究施設

A Lesson of Environment Education in Faculty of Education, Shinshu University

Ryuichi WATANABE

Faculty of Education, Shinshu University

世界レベルでの環境教育に関する共通理念、目標を唱った、1975年のベオグラード憲章によれば、環境教育のまず最初の対象は教員養成の大学教育であるとされている。考えてみれば当然のことであるが、日本では教員養成大学、学部において環境教育がむしろ進んでいないのが現状である。それでも全国の教員養成系学部の中には、東京学芸大学の情報環境科学課程、秋田、滋賀大学の環境情報コース、静岡大学の自然環境教育コース等、すでにいくつかのコースが設置され、今年度には京都教育大学に「環境教育実践研究センター」が新設された。この信州大学では、教養部において総合講座「自然保護」が全国的にも先駆的な授業として開講されてきたのであるが、自然教育研究施設をもつ当教育学部においては十分な授業展開が実現できていない。環境教育における大学教育の重要性がますます高まる中、教育学部においても、90年度より「自然教育」の名で正規の授業が行われるようになったので、参考として、今年度に著者が行った「自然教育」の前半7時間の授業題目を紹介したい。

信州大学教育学部。平成4年後期授業「自然教育」前半の授業題目

1. 自然教育とは何か

環境教育の入口であり、どの学年からでも無理なく入ることが出来る環境教育の入門編。

自然＝地球生態系の特徴。食物連鎖、物質循環とエネルギーの流れ、太陽から宇宙へ、宇宙に浮かぶ系。

演習：水を例に身近な生態系を描く。

2. 世界の自然と森林

海と陸、砂漠—森林、森の定義、種類（熱帯地域から寒帯まで、世界と日本）、ブナ林の構造と動態、森と環境保護、機能、役割（薬等）、原生林と二次林。

3. 林業の特徴と現在

環境保全から始まる林業の歴史、分野、立地論、地代論、重長大安、世界の林業、熱帯林業の現状、熱帯林問題と日本。

4. 山村地域と開発

山村の現状、都市と山村の過疎、全国総合開発、リゾート開発、環境教育と地域開発、世界での例；エコミュージアム、グランドワーク、市民農園。

演習：ゲーム（ジグソーパズル）による開発教育。

5. 環境教育の歩み、世界と日本（年表参照）

公害から環境問題、環境教育へ（世界と日本）、国連環境会議1972年、ローマクラブ、ベオグラード憲章、UNEP、IUCN。

演習：双六（タイと日本の子供の一日）による環境教育の実践。

6. 自然教育の現状。

子供や国民はどこで環境教育に接することができるか。学校、行政、民間、授業、志賀施設、民間団体での実践例の紹介。

演習：ロールプレイング（にこにこ村に高速道路が来る）による環境教育の実践。

7. まとめ

自然、自然と人間、社会、それぞれの原理。環境教育は実にいろいろな物や現象、問題点が教材となりうる。それらを適当な教材として選び、完成させる上では指導者の分析力が重要となる。ここでは、環境教育を実際の教室や野外で実践する上で、指導者がもつべき基本的な視点を私なりに整理して、学生と「環境教育において判断の規準となる価値観をどう扱う」というテーマで議論を試みた。

環境教育で扱う分野は「自然（生き物同士の関係）、自然と人間の関係、社会（人間と人間の関係）」の3つである。

「自然」を見る視点としては、1. それがどれほどの

人為の影響を受けているか、2. それはどれほど長い時間自然のままを保っていたか、3. それはどれほどの広がりを持っているか、の3点をあげたい。これがつかめれば、環境教育の対象としての自然の特徴は十分に理解できるだろう。

〔自然と人間〕とは円の下部が自然で、上部の人間を自然が支えているという図で理解できるだろう。水や空気といった直接に目に見えて支える自然もあれば、観光や文化的風土といった目に見えない自然もあるが、いずれにせよ自然は土台として人間の生活を支えていることはまちがいない。その支えるあり方が地域や民族によって異なり、それが文化とも呼ばれる物ではないか。現在、人間の活動は飛躍的に大きくなり、それを支えていた自然そのものを大きく破壊して、両者のバランスが失われてしまった状態が環境問題なのではないだろうか。

環境問題の解決には〔社会〕そのものの変革が必要なおことはおおくの人の指摘するところである。問題に〔気づき〕、〔理解し〕、〔解決の技術を修得し〕、〔解決の道に参加する〕といった環境教育の目的（ベオグラード憲章より）達成のためには、この現在の社会を的確に理解する視点がどうしても欠かせない。私は社会学は専門ではないが、環境教育の観点から勉強した範囲では、社会の歴史原理が、〔自由、平等、連帯〕へと発展してきたと考えられた。現代の地球規模にまで拡

大した環境問題は、南北格差に象徴されるこの〔連帯〕のありかたをめぐって全世界の政治、経済をどう変えて行くのかをせまっております、その選択の時代にきているのではないだろうか。以上が私なりのまとめであったが、学生からは具体的な反論、意見はでなかった。

この授業の効果や結果についての評価、検討は今年には行っていないが、90年の授業での学生アンケートと今年の質問等を考えると、学生達の環境教育に対する関心は深くなっていることが伺える。また、授業の中では、ゲームやロールプレイといった動きのある演習をいくつか実施してみたが、いずれも人気があった。これらは小学校教育用のものであったが、大学生も十分に楽しみながら学習できるものであった。近年の環境問題のあまりにも急速な進展のために毎回の授業資料の整理には結構時間がかかった。その点でも環境教育の適切な教科書、資料集作成が必要だと痛感した。

第三回環境教育学会大会（1992年、愛知教育大学）において今年初めて〔大学における環境教育〕という分科会が設けられ、情報交換と制度化への検討が始まった。当研究会においても信州大学における環境教育の体系について今後十分に検討する必要があるだろう。

1992.12.14